

銀河系列ダーツの旅

鳥山憂

さあ、お次は当番組お馴染みの名物企画「銀河系列　ダーツの旅」。司会の投げたダーツの当たった星を訪れる、行き当たりばったり運任せな旅です。前回は生命体の影も形もない小惑星に当たってしまいました。今回は無事にテレビ映えするような星に当てることができるのでしょうか（笑）。

（スタジオ…笑い声）

では、投擲をお願いします…：

（スタジオ…回り始める）

（司会者、ダーツを投げる）

…：お、おお、ここは…：

割と大きめの星に当たりましたね。どれどれ…：

ここは、見る限り「チキュウ」という星らしいですね。

青と緑の斑模様が美しい星ですね。はてさて、ここで一体どんな生命体や景色に出会えるのでしょうか…：

それでは、VTRをどうぞ。

「…：次のニュースです。昨日未明、D国××州において、長さ三百kmほどの筒状の物体が、地中に刺さったような状態で発見されました。周辺の地形が変形しクレーターが出現しており、D国政府は宇宙からの飛来物ではないかとの見解を示しています…：」

D国からは遠く離れたここ日本でも、今朝はこのニュースで持ちきりだった。映像を見るだけでも、赤錆のよな色のとてつもなく大きな筒が、周囲の地面をえぐりながら突き刺さっている様子は、まるで神が地球に対して天誅を加えたかのようなだった。

「ほんと、日本じゃなくてよかったばい。向こうの人は大変とねー」

母親が菓子パンを頬張りながら、他人事のように呟く。幸い、墜落現場は人の住んでいない荒野地帯だったため、周辺の建物や人間に被害はなかったようだ。

と、そこでテレビから、緊急速報の通達を告げるアラームが聞こえてきた。

「…：今入ってきた情報です。ただいま、アメリカ航空宇宙局の鑑定調査の結果が出たようです。アメリカ航空宇宙局の調査によると、D国に飛来した物体は地球上で確認できない物質から構成されており、宇宙からの飛来物である可能性が極めて高いということです…：」
テレビのアナウンサーも、興奮を隠しきれない様子で伝えている。世界中が、そのニュースに沸き立っていた。

さあ、やって来ました「チキユウ」。なんと皆さん、この星には知的生命体がいるということですよ！（拍手）ここはその中でも「ニホン」という国のようです。上から見ていたときは灰色の建物が多かった印象ですが、川や木々などの自然も豊かで美しいですね。

おっと、ここで幸先良く第一星人^{ほしびと}発見！ この星の生命体は、肌が黄色く二足歩行、我が星における食用家畜、モルキーのような形をしていますね。面白いです。

「こんにちはー」

さっそく自動翻訳機を作動させて、声をかけてみます。「ここで何をされているんですか？」

「あ、こ、こんにちは……えっと、いつ、今から学校に行くところ……」

「そうですかあ」

ガツコウ、が何かはわかりませんが、どうやら急いでいるみたいですね。すみませんでした。

「この星の見どころなどはありますか？」

「えっ、み、見どころ……ですか？ えっと……星なら、な、NASAとか……」

なるほど、NASA……は、アメリカという国にあるようです。行ってみましょう。

「ありがとうございます」

チキユウジンにお礼を言っ、アメリカへ移動します。

珍しく朝のニュースを見て遅刻しそうになりつつも、朝ご飯をかき込んで家を出る。きつと高校でも、皆このニュースの話をすることだろう。宇宙からの飛来物、しかもあんなに人工物めいた物体なんて、我々男子高校生
の感受性を揺さぶらないはずが――

そう思いながら歩いていると、前方に異様なものを認め、思わず足を止めてしまった。

銀色の肌、背は低く足が五本、そのうち三本で歩いていて、まるで魚のような形をしたそれは、

「コ※ニチハ」

歪な機械音声のような声で、こちらへ近付き言った。

「Xコデナ◇ヲサ※@イルンデ△カ？」

「あ、こつ、こ、んには……？ え……つと、いつ、今から、が、学校に行くところ……」

「ソ*デスカア」

黒目しかない瞳で見つめられ、思わず吐き気が込み上げそうになる。とりあえず、早く話を切り上げねば。

「コ&ホシノミ\$コロ>☆ハア#%スカ？」

「えっ、み、見どころ……ですか？」聞き取るのも一苦労だ。「えつと……星なら、な、NASAとか……」

相手の異星人としか言いようがない姿と、今朝のニュースから頭が勝手に「星」を連想してしまった。

「ア+*トウ◎ザイマ□タ」

そう言うのと、異星人は三本足で去って行ってしまった。

さあ、ニホンの星人から教えてもらった「NASA」という施設にやって来ました。ニンゲン社会の中では立派な建物で、これは何でしょう…ロケット？ ですかね、ずいぶんと前時代的な…

「ウワーツ、な、なんだお前は!？」

おっと、施設のニンゲンでしょうか。いくら異星人とはいえ、いきなりお前とは失礼な方々ですね。

「こんには、私はラコラワ星から旅をしに来た、ヨージ・トロコジと申しまして…」

「こ、こいつ喋るぞ! 捕えろ!」

なんと、このニンゲンの男、私のことを捕まえようとしているのでしょうか。警報が鳴って大勢のニンゲンが現れます。

こうなれば仕方ありません。正当防衛です。

「ウワーツ!」

光線銃を撃つと、ニンゲンたちは肉を融かしてバラバラと倒れていきます。面白いですね。

…おおっと、また現地の人々を手にかけてしまいました。証拠隠滅のために、この星も消し飛ばしてしまいましよう。

(ヨージ、宇宙船に乗り込み、上空から爆弾を落とす)

(チキユウが大爆発し、宇宙から跡形も無く消える)

(テロップ…「おわり」)

(スタジオ…笑い声)

男は、その決定的瞬間を目撃した、ただ一人の人間だった。NASAで宇宙開発に携わっていた彼は、その時偶然にも、その生物を目撃してしまった。

銀色の肌で三足歩行をする、不気味な生命体の姿を。

「ウワーツ、な、なんだお前は!？」

そう声を上げたのが、運の尽きだった。だがまともな本能を持った人間なら、当然の反応でもあった。

「コ*ニチハ、\$タシハ##ラワ!イカラタビ&シニキタ、+ージ・ト*?ジート>ウシマ<テ…」

「こ、こいつ喋るぞ! 捕えろ!」

男は命の危機を感じたのか、緊急ボタンを押しに走ると、銃を構えて生物めがけて射撃した。弾は確かに生物を直撃したものの、全く怯んだり動きを止める様子がない。それどころか生物のほうも、懐から銃を取り出す。

「ウワーツ!？」

銃からは実弾ではなくレーザーが放たれた。それに当たった施設の人間たちは一瞬で体を融かされ、苦しみの声を上げる暇もなく肉塊となり、床へ転がる。

瞬く間に戦意を喪失した男は素早く物陰へ身を隠す。

すると、男が震えている間に生命体は天井に穴を空けてステーションを飛び出し、どこかへ消えてしまった。

その数分後、いや、数秒後だったかもしれない。今となっては知る者もないし、その結末に比べたら些細なことだ。

地球は爆散し、銀河系から消滅した。

〈おわり〉